

学校・地域連携カリキュラムを通じた小中一貫教育の推進

—地域とともにある室積学園をめざして—

宮内 朋子^{*1}・松田 靖

Promotion of integrated elementary and junior high school education
through school/regional collaboration curriculum:
Aiming to be a Murodumi Gakuen that coexists with the community

MIYAUCHI Tomoko^{*1}, MATSUDA Yasushi

(Received December 15, 2022)

キーワード：小中一貫教育、コミュニティ・スクール、学校・地域連携カリキュラム

はじめに

光市立室積中学校で小中学校のほとんどをコミュニティ・スクールの中で育った令和2年度の中学3年生にアンケートを実施したところ、「室積地域のよさ」として、第1位に「地域の人」を挙げていた。その理由としては、地域との交流が多いこと、人が優しいことを挙げています。これまで積み上げてきた学校と地域の連携・協働による成果を子どもたち自身が感じているからではないだろうか。

室積中学校が立地する室積地域は、白砂青松を誇る室積海岸を有し、室積港は天然の良港として室町時代から栄えた歴史をもつ。特に江戸時代には室積港を基地とする回船業が盛んになり、多くの人や物が行き交い繁栄を誇った。室積地域は美しい自然と歴史や文化に恵まれた地域であり、学習材が豊富にある。室積中学校は平成25年から、同じ室積地域にある室積小学校は平成26年からコミュニティ・スクールとなり、地域と連携・協働した教育活動を盛んに行っている。

光市では、子どもたちが生きるこれからの社会で求められる資質・能力を確実に身に付けさせるため、小中学校が同一方針のもと、地域とともに取り組む小中一貫教育の手法を用いて、さらなる質の高い学校教育をめざすことを目的として、令和2年度から小中一貫教育が実施されている。室積中学校は、同じ室積地域にある室積小学校とともに、施設分離型小中一貫校「小中一貫室積学園」となった。そこで、小中一貫教育とコミュニティ・スクールを核とする地域連携教育を一体的に推進することが小中一貫教育のもつ意義をどのように高めるのか、本実践研究において実証していきたい。

1. 研究の背景と目的

山口県では、平成29年告示の学習指導要領の趣旨を踏まえ、「社会に開かれた教育課程の視点をもとに、学校と地域が連携・協働する教育活動を体系的に示したカリキュラム」と定義した「学校・地域連携カリキュラム」の作成を推進している。山口県教育のめざす方向性等を示した「令和3年度 山口県教育推進の手引き」には「やまぐち型地域連携教育を活用して、地域との連携強化を図る中で、更なる校種間の連携を推進する」と記されており、小中一貫教育を地域連携教育と一体的に推進していくことで更なる充実を図ろうとする意図が見受けられる。

コミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育を推進している先行事例として、東京都三鷹市が挙げられる。貝ノ瀬(2017)の『図説コミュニティ・スクール入門』によれば、三鷹市は、義務教育9年間の教育を、現行の法制度の下で、既存の小学校・中学校を存続させた形で、コミュニティ・スクールを基盤とし

*1 山口県教育庁地域連携教育推進課(令和2年度入学 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻学校経営コース)

て、小・中一貫カリキュラムに基づき、系統性と連続性を重視して行い、一定の成果を収めている。

さらに、平成26年12月に出された中央教育審議会「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（答申）」では、「小中一貫教育の総合的な推進方策として、地域ぐるみで子供たちの9年間の学びを支える仕組みとして、小中一貫教育とコミュニティ・スクールを組み合わせることで実施することが有効であり、中学校区内の小・中学校における一体的な学校運営協議会の設置を促進する必要がある」ことが提言されており、小中一貫教育とコミュニティ・スクールの一体的な推進を図っていくことの有効性について言及されている¹⁾。

平成29年告示の学習指導要領は、情報化、グローバル化、人工知能が急激な社会的変化をもたらす予測困難な時代で、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に育むことが必要であるという背景から、「社会に開かれた教育課程」をテーマとして、改訂が行われている。子どもの実態、地域の実態、社会の変化を見据えながら、子どもが身に付けるべき力とは何か、子どもが何をどのくらい身に付けたか、子どもが何をどこまで到達したかについて、家庭・地域と共有、社会と連携・協働しながら実現していく。つまり、学校現場は、この指針に基づき、未来を担う子どもたちに必要な力を付けるために、教育活動を展開することが求められている。さらに、子どもたちや学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントに努めるものとされている。

そこで、室積学園におけるこれまでのコミュニティ・スクールとしての教育活動を整理することを通して、それらの活動が「何のために行うのか」「その活動を行うことによって子どもたちにどんな資質・能力を身に付けるのか」などの視点を明確にし、「学校・地域連携カリキュラム」の充実を図りたいと考える。そうすることで、室積学園の教職員や地域が、9年間を通して同一歩調で子どもたちを育てることを意識化することができるのではないかと考える。さらに、「学校・地域連携カリキュラム」を通して組織的な学校運営を展開することで、より一層の小中一貫教育の充実につなげていきたい。加えて、それらがどのような成果をもたらすのかについて検証－改善を行い、学校の活性化につなげることで、室積学園の学校教育目標である「日本一学びが好きな『むろづみっ子』の育成」の達成を実現することを研究の目的としたいと考える。

2. 学校運営協議会の熟議を通じた「学校・地域連携カリキュラム」の作成

室積学園では、学校運営協議会の熟議を通して「学校・地域連携カリキュラム」を作成した。「学校・地域連携カリキュラム」を学校運営協議会の熟議を通して行うことへの目的は、学校教育目標を達成するために、めざす子ども像や子どもたちに身に付けたい資質・能力に即し、学校・地域で連携・協働する学習のねらい・目的、活動内容を学校・家庭・地域で共有していくことにある。

2-1 共有する（学習のねらいを通して9年間の学びをつなぐ）

「学校・地域連携カリキュラム」を作成するにあたり、学校運営協議会委員と教職員で最初に行ったことは、「共有する」ということである。妹尾（2015）は、到達目標を共有していくには、学校・家庭・地域で、過去や現状、近い将来の見通し等に関する「情報の共有」と、問題意識や危機感、あるいはこう変えていきたいというビジョンなどの「思いの共有」が必要であることに言及している。また、佐藤（2016）は、著書『コミュニティ・スクール「地域とともにある学校づくり」の実現のために』の中で、「学校と地域が情報共有し、相互理解を図ることによって地域が協力的になると同時に学校支援が活発にもなって、これらの過程で連携が組織的に行われるようになる。その結果、地域教育力が向上し、さらに地域が活性化し始める」と述べている²⁾。さらに、柳瀬（2013）は、小中一貫校をつくるにあたって、教員の負担感の軽減やモチベーションの向上が課題であるとし、教員が達成感を感じるためには、児童生徒の成長を小中が一緒に実感できる場面をつくること、「9年間のゴール」を明確に設定することが必要であると言及している。これらの考え方からは、いずれも「共有する」ことが相互理解のために不可欠であり、マネジメントにつながる重要な要素であると理解することができる。

「室積学園・地域連携カリキュラム」は、室積学園学校運営協議会の熟議を通して作成したことに大きな

特徴がある。学校運営協議会の最初に、「学校・地域連携カリキュラム」を作成するために、室積学園として①室積学園教育目標「日本一学びが好きな『むろづみっ子』の育成」に向けて、②子どもたちに身に付けたい資質・能力を明確にし、③室積学園9年間を見通し、学校と地域が連携・協働する教育活動を体系的に示したカリキュラムを編成する、ということを確認した。次に、室積学園を貫く組織である「学び部会」「ボランティア部会」「ふるさと学習部会」ごとに、9年間の学習のねらい・目的、活動内容を確認し、一覧表に整理した。

「ふるさと学習部会」では、熟議で学習のねらい・目的、活動内容を協議する中で、「地域の中に入り【in】、地域について知る【about】、そして地域と一緒に活動する【with】ことで、最終的には地域のために何ができるかを考える子どもたちを育成し、地元愛・郷土愛を育む【for】」というように、9年間でねらいをつなげてみると、

【in→about→with→for】となり、ねらいに軸が通り、学年が上がるごとに高度化されていることがわかった。「学び部会」「ボランティア部会」でも同じようにねらいの軸を通し、9年間の学びの系統性を大切にすることを確認した。各部会で出されたねらいの軸は、図1のようになる。

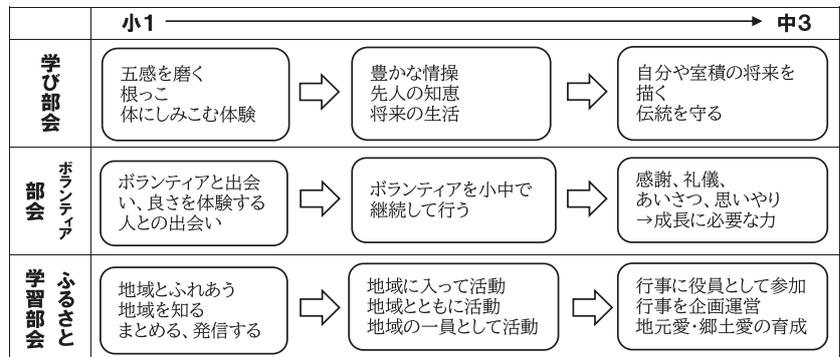


図1 学校運営協議会の各部会で出されたねらいの軸

2-2 連動させる（室積学園として子どもたちに身に付けたい資質・能力を決める）

室積学園は、小中一貫校としてスタートする前年の令和元年度に室積学園教育目標「日本一学びが好きな『むろづみっ子』の育成」と、15歳のめざす子ども像「自分を見つめ、夢をもち、人との関わりを大切にし、地域を愛する子ども」を策定した。これらも学校運営協議会の熟議を通して策定されたものである。

学習のねらいの軸が表出された後に考えていったことは、室積学園として子どもたちに身に付けたい資質・能力をどんな言葉で整理をしたらいいのかということである。そうすると、図2で示したように、「室積学園のめざす子ども像」と一致することが見えてきた。そこで、室積学園として子どもたちに身に付けたい資質・能力について、めざす子ども像「自分を見つめ、夢をもち、人との関わりを大切にし、地域を愛する子ども」と方向性を一致させて、夢を描く力・人と関わる力・地域の未来を見通す力（以下、3つの力）と策定した。以上により、室積学園として学校運営を進めていくための中軸となる教育目標、めざす子ども像、子どもたちに身に付けたい資質・能力がいずれも学校と地域の熟議によって策定された。

OECDの『Learning Compass 2030（学びの羅針盤 2030）』（2019年5月）は、教育の未来に向けての望ましい未来像を描いた進化し続ける学習の枠組みで、個人と集団のウェルビーイング（Well-being）の方向性を示すとともに、「生徒のエージェンシー（Student Agency）」として、子どもたちが社会を変革していくため自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性を指摘している。室積学園で策定した3つの力は、個人と社会全体のウェルビーイングを実現するためにも重要な視点であると捉えられる。「夢を描く力」は個人のウェルビーイングに、「地域の未来を見通す力」は社会全体のウェルビーイングにつながる。さらに、個人と社会全体のウェルビーイングを達成していくためには、「人と関わる力」は不可欠になる。このような視点からも、3つの力は、個人と社会全体のウェルビーイングにつながる重要な要素を含んでいると言える。



図2 めざす子ども像と身に付けたい資質・能力の関連

3. 「学校・地域連携カリキュラム」を通じた小中一貫教育の推進

令和2年2月に行われた「山口県地域連携教育担当者合同研修会パネルディスカッション」において、室積学園がパネラーとして参加する機会を得た。その時に、室積学園地域学校協働活動推進員と教職員によって語られた言葉を表1に示す。この中に学校と地域の熟議によって「学校・地域連携カリキュラム」を作成したことによる成果が語られている。

表1 「学校・地域連携カリキュラム」を作成したことによる成果

<ul style="list-style-type: none"> ・これまでは、小中バラバラに行っていることがあってもったいないと感じていたが、目に見える形で整理され理解しやすい。 ・めざす子ども像とのつながりができた。 ・枠組み（羅針盤、地図）があるとやりやすい。転勤があっても人が変わっても何をやるのかがわかって効率が良い。動きやすくなる。 ・行事をする上で一つのめあてを意識させながら取り組むと9年間の中で何をめあてにすればよいのかわかり、つながりができる。 ・これまでは感覚的にやってきた。自分のことだけで他が見えなかったが、他が何をしているのかもわかるようになった。 ・時間はかかったが、同じ方向にベクトルをそろえることができた。小中連携から一貫にあがることの意味は15歳まで責任を共有するという。やっていることを連続性のある中で価値づけるということ。

この中に語られている言葉には、小中一貫して見通しをもって教育活動を行うことや地域と連携・協働していくことの意味や意義を見出すことができる。「学校・地域連携カリキュラム」を作成したことにより、それを「学びの地図」と捉え、連続性や系統性を意識しながら教育活動にあたることの意味を言葉に出して語る人が多くなってきたことも事実である。

そうであるからこそ、次に考えたことは、この「学校・地域連携カリキュラム」をどう活用していくかということについてである。活用過程について、以下に述べていく。

3-1 工夫し参画機運を高める（資質・能力に即したカリキュラム・マネジメント）

「室積学園・地域連携カリキュラム」を作成して改めて浮き彫りになったのは、小学校と中学校の連結部分が分断されているということである。（図3）小中一貫教育は、小学校から中学校への円滑な接続を生むためにも小5から中1の中期が大切になることは多くの先行研究から指摘される点である。そこで、「小中合同で取り組める学習はないか」ということを協議することで、小中一貫教育の特色、ねらいでもある「小中連結部分」の取組を学校・地域で工夫していった。

また、「室積学園・地域連携カリキュラム」を作成して、改めて室積ならではの取組がたくさん含まれていることを共有することができた。

「地域の方と一緒にできる学習はないか」ということを協議することで、教職員の地域とともに学校教育を進めていく意識、地域の方の参画機運を高めていった。

「学校・地域連携カリキュラム」を作成することは、とても価値のあることだ。しかも、学校と地域で熟議して作成したカリキュラムであれば、なおさら関係する人々の意識の高揚につな

		教科	総合	特別活動	体育						
子ども像 ねらい 学びの地図 地域連携カリキュラム	自分を知り、夢をもつこと 夢を掲げる力	小1 (1年目) 五感を磨く 五感マップ(国) Let'sダンス(体)	小2 (2年目) 体しめこむ経験をする 七福神(算)	小3 (3年目) 豊かな想像を養う 豊か想像会 10歳のお話 読書発表 絵本朗読(体)	小4 (4年目) 先人の知恵を知る 先人の知恵(算) 先人の知恵(国) 先人の知恵(体)	小5 (5年目) 伝統を守る 伝統を守る(算) 伝統を守る(国) 伝統を守る(体)	小6 (6年目) 将来を築く 将来を築く(算) 将来を築く(国) 将来を築く(体)	中1 (7年目) 将来を築く 将来を築く(算) 将来を築く(国) 将来を築く(体)	中2 (8年目) 将来を築く 将来を築く(算) 将来を築く(国) 将来を築く(体)	中3 (9年目) 将来を築く 将来を築く(算) 将来を築く(国) 将来を築く(体)	
	人との関わりを大切にすること 人と関わる力	人と比喩 A 視覚学習(算)	ボランティアと出会う ボランティアの意義(算)	ボランティアの意義を体験する ボランティアの意義(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける E 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける K 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける L 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける M 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける N 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける O 視覚学習(算)	人とよりよく関わる力を身に付ける P 視覚学習(算)
	地域の未来を見据えること 地域の未来を見据える力	地域とふれあう G 地域学習(算)	地域を知る H 地域学習(算)	地域とともに活動する I 地域学習(算)	地域の一端として活動する J 地域学習(算)	地域行事を企画実践する K 地域学習(算)	地域の未来を考慮する L 地域学習(算)	地域の未来を考慮する M 地域学習(算)	地域の未来を考慮する N 地域学習(算)	地域の未来を考慮する O 地域学習(算)	地域の未来を考慮する P 地域学習(算)

図3 分断されている小中連結部分

がるだろう。だからこそ描くだけで終わらせることなく、「学校・地域連携カリキュラム」を媒体とし、子どもを中心に学校・地域が連携・協働することにつなげていけるかが大切であると考える。

3-2 組織的に運用する

「組織的に運用する」ことは何のために必要なのだろうか。佐古（2019）は、学校組織は他の組織と比べて「個業型組織」になりやすく、根本的な解決につなげていくためには、要因や背景に手を打つ必要があることを指摘している。そのためには、「教育活動の成果や課題は最終的には子供の姿や変容によって判断されるべきものであるから、学校のプランニングにおいては、第一義的に子供の実態の確認から着手すべき」であり、「マネジメントサイクルは、PDCAとして定式化するよりも、実態確認（Research）をつけて、R-PDCAとして定式化した方が適切」とも述べている³⁾。そこで、組織的に学校運営を進めていくために、図4のような「室積学園・地域連携カリキュラム」を基軸としたR-PDCAサイクルを確立することが必要であると考えた。

このR-PDCAサイクルを確立し、3つの力を子どもたちに身に付けることに学校・地域で組織的に取り組むために、次の6つの項目を提案し実践した。

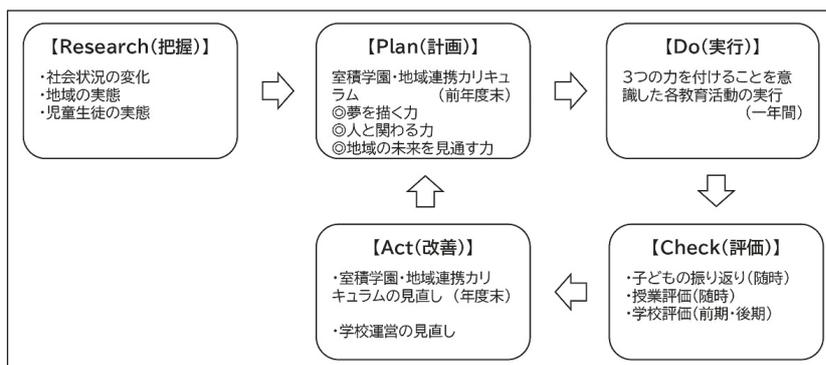


図4 「室積学園・地域連携カリキュラム」を基軸としたR-PDCAサイクル

3-2-1 推進組織の設置（小中一貫教育とコミュニティ・スクールに関する組織の一本化）

令和3年度室積学園小中一貫教育・CS推進組織を図5に示す。室積学園学校運営協議会の下部組織であったCS推進委員会と小中一貫教育推進委員会を一本化し、室積学園小中一貫教育推進協議会とした。小中それぞれの教務主任、生徒指導主任、研修主任が3部会の部会長を担うことで、学園運営の要であるコミュニティ・スクールと小中一貫教育が連動して推進できる仕組みになっている。組織を一本化することによって、多くの教職員がコミュニティ・スクールと小中一貫教育について、意識をして取り組めるようになった。

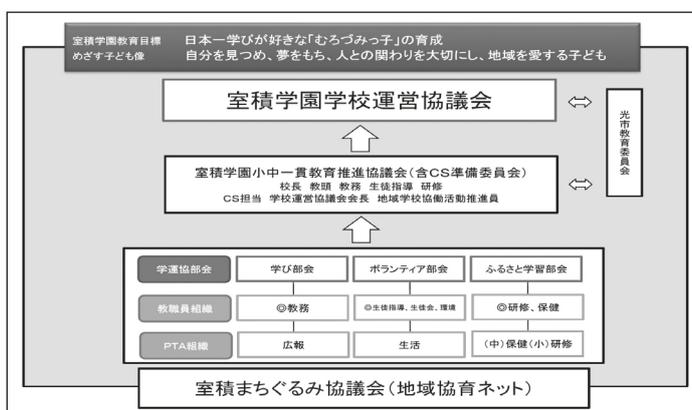


図5 令和3年度室積学園小中一貫教育・CS推進組織

3-2-2 カリキュラム・マネジメントを通した子どもたちのつながりづくり

小中一貫教育を推進していく上で、小学生と中学生のつながりをつくることは必要不可欠である。そこで、新しく何かを行うよりは、既に行っている学習の中で、小学生と中学生の接点を見出し、子どもたちのつながりをつくるために、室積学園学校運営協議会や令和2年度小中一貫教育推進委員会（後の室積学園小中一貫教育推進協議会）で熟議を行った。その中で、「室積学園・地域連携カリキュラム」をもとに、室積海岸清掃、生徒総会、中学校運動会予行練習見学の3つの教育活動において、小学生と中学生の学習活動のつながりをもたせることにした。この中から生徒総会について述べていく。

令和3年の生徒会スローガンは、「繋（きずな）」である。このスローガンは、生徒同士のつながり、小学校とのつながり、地域とのつながりを大切にした生徒会をつくらうという意図で策定されたものである。令和3年度の



図6 生徒総会の様子

生徒総会は小学6年生と中学生で「室積 繫（きずな） プロジェクトを考えよう」を議題として行われた（図6）。ゴミ拾いウォークラリー、マスコットキャラクターをつくって室積をアピールする、室積の伝統的な祭りを盛り上げる応援プロジェクトなど、小学6年生も含む各学級から、たくさんの夢のあるプロジェクトが提案された。生徒総会では、小学6年生も中学生も約2時間半に及ぶ活発な意見交換を行った。生徒会副会長が生徒総会の最後のあいさつの中で「室積地域について深く考えることができたことを、地域の担い手として誇りに思ってください」といった言葉を児童生徒に向けて述べている。プロジェクトを考えることを通して、室積について考え関心をもつことの意義やそうすることが「地域の担い手」としての役割を果たしているという非常に鋭い視点で語られている。このような言葉が生徒自身によって語られることに、コミュニティ・スクールとして少しずつ長い時間をかけて地域との連携・協働した学習を展開してきたことの価値と確かな手応えを見出すことができる。

生徒総会後に行った振り返りでは、いずれも高い肯定率を得た。結果を図7に示す。

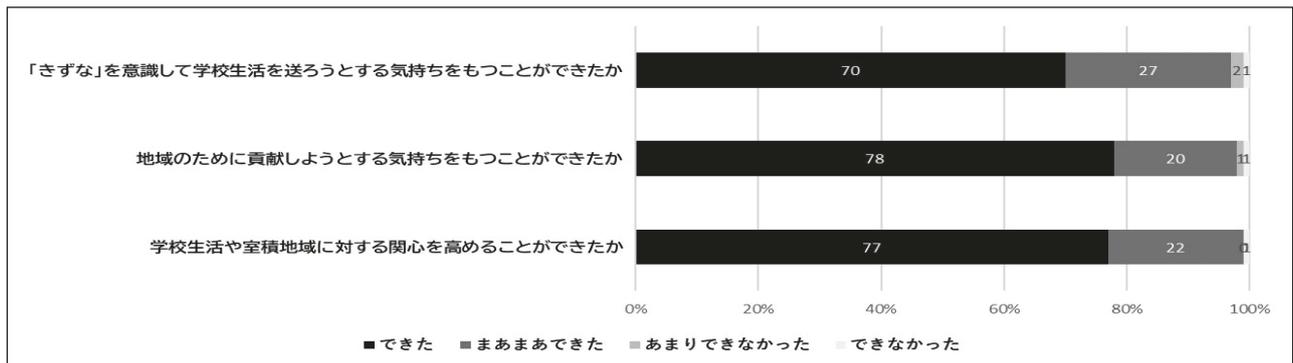


図7 生徒総会後の振り返りアンケート結果（小学6年生、中学生実施）

また、感想からは、先輩学年に憧れを抱いたり、地域に貢献したいという目標を持ったり、さらに地域と交流を深めたいという意欲の高揚につながったりしていることがわかった。あわせて表2に示す。

表2 生徒総会後の児童生徒の感想

- ・中学生のみなさんがすごいなと思いました。姿勢が正しかったこと。生徒会役員の人で生徒総会を進めていたこと。積極的に質問をしていたこと。質問をされたらスラスラと答えていたこと。（小6）
- ・室積に対する取組を考えると、室積をもっとよくしたいという気持ちが高まりました。人と意見を共有して、案がまとまってくると、素晴らしい案ができあがるとわかりました。（中1）
- ・生徒総会はすごい行事だなと思った。6年生と中学生で話をしたら、室積学園だと感じた。これからも小学生と中学生の関わりを増やしていきたい。（中2）
- ・みんなが考えた案で室積がさらによくなり、地域の方と交流が増えたらいいと思った。（中2）
- ・生徒総会を通して、他学年の人はどんな考えをもっているのかを知ることができた。そして考えを深めることでよりよいプロジェクトをつくることができ、とても意味のある会にすることができたのではないかと感じた。（中3）

さらに、生徒総会で出された意見を執行部がまとめ、学校運営協議会に提案した。地域の方からは「できない理由を探すのではなく、できる方法を考えて、子どもたちと一緒に室積を盛り上げよう」という言葉をいただき、子どもたちの背中を押していただいた。子どもの声が学校と地域をさらに繋いでいくための、大きな求心力となった。生徒総会を通じた学校運営協議会への参画がきっかけで、地域の方からご提案をいただき、光市全戸に配付される室積商店会の観光案内チラシに、中学生が考案した室積地域のおもしろ情報が掲載された。加えて、室積地域をPRするためのマスコットキャラクター「むろぞう」が子どもたちと地域の方により誕生した（図8）。さらに、令和4年度には地域の方の発案により、「みたらいいアートプロジェクト」として室積にある西ノ浜の防潮堤に子どもたちと地域の方によって「むろぞう」等のイラストが壁画として描かれた。これらのことを通して、子どもたちが地域づくりの一翼を担うことになった。以上のことは「地域とと

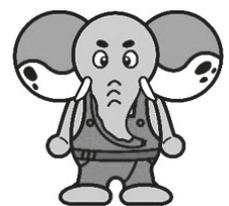


図8 室積地域マスコットキャラクター「むろぞう」

もにある室積学園」の姿を具現化するものであると捉えている。

3-2-3 資質・能力に即した学校評価の組織的運用

R-PDCAサイクルで重要な要素となるのは、【R (Research) 実態把握】であり、【C (Check) 評価】の部分であると考えられる。社会状況や児童生徒、地域の実態をもとに立てたプランを実行し、それが目的と合致しているかどうかを評価していくのである。室積学園としては、学園教育目標とめざす子ども像と方向性を一致させて、子どもたちに身に付けたい資質・能力である3つの力を明確にした。この3つの力が実際に子どもたちに身に付いているのかどうかを確認するために、発達段階をふまえ、小中一貫校として同じ視点で評価していくことが必要になる。そこで、これまで小中学校それぞれで行っていた学校評価を部会と連動させて、室積学園として3つの力を子どもたちに身に付けるための評価項目に再構成した。評価項目の作成は、室積学園教職員や学校運営協議会委員の熟議を経て行われた。

再構成した結果、学び部会は、「夢を描く力」を身に付けるために、「学習理解」「学習準備」「家庭学習」「体力向上」「目標努力」について、ボランティア部会は「人と関わる力」を身に付けるために、「言葉遣い」「規範意識」「情報モラル」について、ふるさと学習部会は「地域の未来を見通す力」を身に付けるために、「郷土愛」「地域行事への参加」「防災教育」について評価する項目を設定した。

評価項目を設定するという事はゴールを決めるということである。どうしたらゴールに近づけるか、あるいは近づけなかったら何が足りなかったのか、組織的に検証を進めていくことが小中一貫教育を推進することにつながり、地域と共有することでコミュニティ・スクールとしてさらに学校と地域が連携・協働することになるのではないかと考える。

3-2-4 資質・能力を付けるための校内研修の実施

学校運営協議会委員と室積学園教職員でユニット型研修会を実施した。「地域の未来を見通す力」をねらいとして、中3の道徳で実施した。地域の方が子どもたちと授業で協議し、授業後は教職員と研究協議を行った。

実施後の生徒の感想から、よりよい社会にするためには、自分が積極的に地域づくりに関わっていくことが大切であり今もできることがあること、また、これまで大切に受け継がれてきた室積を次世代に引き継いでいく使命があることに気付いていたことがわかった。こうした言葉は、地域の方とグループ協議を重ねるなかで、今の室積地域の課題にも気づき、自分事として地域の未来を見据える力に変容していった姿と考える。まさしく、室積学園として子どもたちに身に付けたい資質・能力の1つである「地域の未来を見通す力」の育成である。教職員や学校運営協議会委員からも、地域の方に授業に参画していただくことが、子どもにも多面的・多角的な視点で物事を考える視野の広がりをもたらし、子どもたちの学びにとってとても有効であることが語られている。教職員と学校運営協議会委員に「教職員と地域の方で研修をすることは、子どもの学びに有効であるか」というアンケートを実施したところ、100%（強い肯定は77%）の肯定率を得た。地域の方とユニット型研修会を実施することは、子ども・教職員・地域の方、誰にとっても有効であることがわかった。

3-2-5 学校・家庭・地域の連携・協働を促すための情報発信

「共有する」ことは、組織マネジメントを行う上でとても大切な要素であり、小中一貫教育を進めていくためにも小中学校がお互いの理解を深めていくことは大前提としてとても重要である。そこで、まずは室積学園教職員に向けて、「Team室積」という通信を適宜発行した。子どもたちや保護者、地域に対しては、学校や室積コミュニティセンターの掲示板やホームページ、学校だより等を通して情報発信を行った。さらに、地元の新聞やケーブルテレビなど、マスコミを活用することで広域に情報発信をすることが可能になる。他地域の方から「室積は最近元気になった」というお声がけをいただいたことがあるが、これもマスコミを活用した情報発信の成果であると捉えている。

今後は、子どもたちの手で小中相互に、あるいは地域に向けた情報発信をしていくことも効果的であり、そうすることが、子どもたち自身の自覚化を促し、学校と地域の連携・協働をさらに推進していくことにつながると思われる。

3-2-6 学校・地域連携カリキュラムの見直しを通じたR-PDCAサイクルの確立

学校運営協議会で、児童生徒の代表も交えて「室積学園・地域連携カリキュラム」の見直しを行った。熟議の議題を「室積学園と地域で3つの資質・能力を子どもたちに身に付けるために」と設定した。3部会に分かれ、児童生徒の代表、教職員、学校運営協議会委員で、カリキュラムを通して身に付いた力を確認するとともに、もっとこうしたらよくなるといった改善点を出し合った（図9）。

小学生は、事前に学級会で確認した内容について、タブレット端末を用いてプレゼンテーションにまとめた。小学6年生だけでは判断がつかないものについては、該当学年の児童にインタビューするなど、わかりやすく発信するための工夫をして臨んだ。中学生は生徒会執行部が参加したが、昼休みを活用して会議を開き、ワークシートを活用して身に付いた力や改善点などを協議して臨んだ。

当日は、児童生徒の代表、室積学園全教職員、学校運営協議会委員の約60名が参加した。さらに、学校評価検討部会も加え、全7グループで熱心に熟議を行った。小学生は事前に準備したプレゼンテーションを用いて一生懸命グループの人に説明した。中学生の学校運営協議会への参加は、3回目となったが、回を追うごとに自信をもって会議の中で語る姿が見られるようになった。熟議を終えた子どもたちの感想を表3に示す。



図9 学校運営協議会での熟議の様子

表3 熟議を終えた児童生徒の感想

- ・会議を通して感じたことは、中学生のような改善提案がもっと出せたらよいと思いました。中学生には斬新な改善提案があつて、ぼくもそういう提案が出せるようになりたいです。（小）
- ・この会議を通して意識したことは、自分の意見をはっきりと相手に伝えるということです。最初は緊張していたけれど、徐々に緊張感も少なくなって会議に集中することができました。（小）
- ・今日は室積学園・地域連携カリキュラムの見直しについて話し合いました。私はこの熟議の準備をする中で、自分が経験してきたことを改めて見直し、考えることができました。そして、大人の方や中学生だけでなく、小学生も一緒に室積地域の活性化について考えることができるとても嬉しかったです。私たち3年生は室積学園として活動することが少なくなってきたけれど、残りの時間を大切にして、最後まで室積地域の活性化について考えていこうと思いました。（中）
- ・今回は小学生も参加していただき、小学生だからこそ感じていることについて深く考えることができました。小学生も含めて、たくさんの行事で付けていきたい力やこれからの未来についてこの会議で深く考えることができ、これからのよりよい室積につながったと思います。（中）

カリキュラムはコミュニティ・スクールの核心部分であり、学校・地域連携カリキュラムを子どもたちとともに見直すことは、学びの主体者である子どもの声をカリキュラムに反映し、学校としての検証－改善サイクルであるR-PDCAサイクルのマネジメントにつながる重要な意味をもつ。加えて、カリキュラム・マネジメントのゴールは子ども一人ひとりの自己の学びのマネジメントだと考える。室積学園では、評価項目を身に付けたい資質・能力に応じて整理し直した。そうした意味で、子どもたち自身が、めざす姿や身に付けたい力を思い描き、その実現をめざして学び、それを評価している。室積学園は、そのようなカリキュラム・マネジメントに挑戦しているのだと捉えている。

4. 成果検証

学校評価を通して本実践研究の成果を検証した。その一部を図10と図11に示す。

図10は室積学園教育目標への努力に対する児童生徒の評価結果を示したものであるが、6月の肯定率80%に対して10月は82%となっており、2ポイントの上昇が見られたことがわかる。その中でも「全くそう思う」と答えた強い肯定に対しては、6月が29%、10月が36%となっており、7ポイントの上昇が見られた。室積学園教育目標はめざす子ども像、3つの力と方向性が一致しており、室積学園教育目標についての評価は室積学園の教育活動全体を通じた成果とも言えるのではないかと考える。図11からは、室積学園教育目標、3つの力に対する肯定率は、全て8割を超えており、一定の成果が見られたことがわかる。特に、室積学園

教育目標に対する肯定率は91%、その中で強い肯定率は51%に達していることは特筆すべき点である。一方で、夢を描く力の強い肯定率が35%に留まっている原因は、保護者が22%であるとともに、教職員も26%であることが挙げられる。保護者、教職員ともに強い肯定率が低くなっているのは、学習理解（保護者13%、教職員12%）に対する項目である。児童生徒の学習理解への強い肯定率は38%になる。学習理解は夢を描く力を育成するためにも重要な要素と捉えられる。子どもたちが学習内容を理解できたと自己認知できるように、組織的な検証を進め、授業改善等を図っていく必要性を見出すことができる。

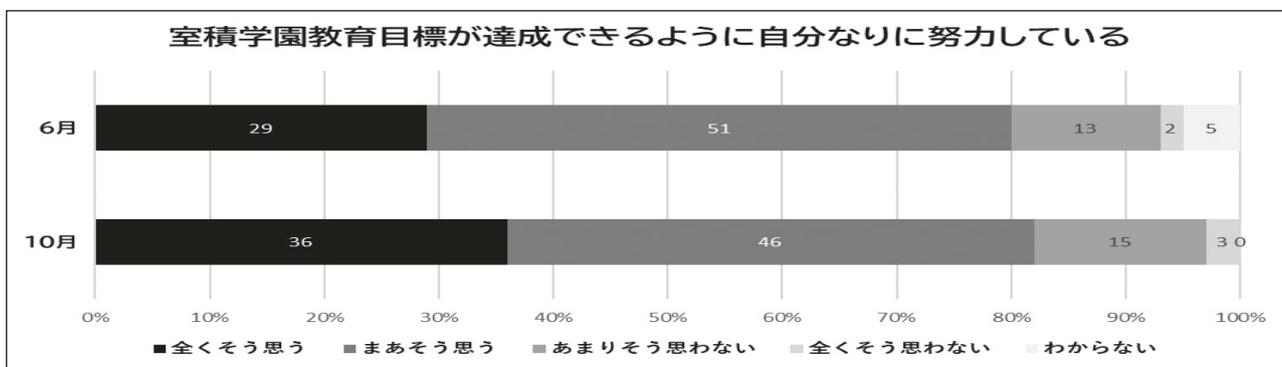


図10 室積学園教育目標への努力に対する児童生徒の評価結果（6月から10月の比較）

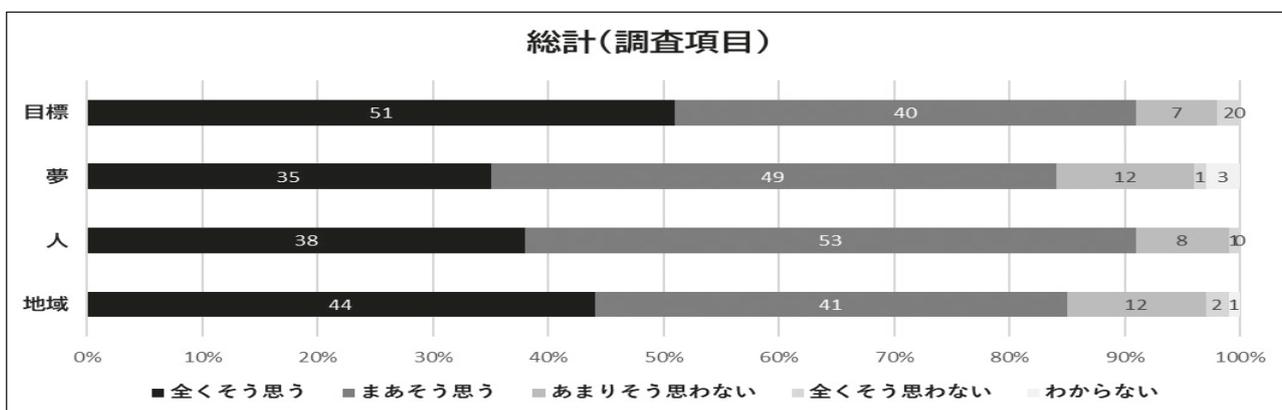


図11 調査項目で表した学校評価結果（令和3年10月実施）

5. 考察と今後の方向性

本実践研究の成果を以下に3点述べる。

1点目は、小中一貫教育と地域連携教育を一体的に推進することにより、それらがねらう意義をさらに高めることを確認できた点である。この2つは親和性が非常に高い。子どもたちの活動後の振り返りを分析すると、上級生への憧れの気持ちが醸成されるとともに、地域に貢献したい、さらに地域と交流を深めたいという意欲の高揚につながることが分かった。

2点目は、学校・地域連携カリキュラムが学校運営協議会の熟議を通して作成されたことによる成果である。熟議で作成できたことが室積学園として大きな自信になり、見える化されたことで学校と地域のさらなる連携・協働を生み、「社会に開かれた教育課程」の実現を図る起点となった。「室積学園・地域連携カリキュラム」をベースに子どもと大人で熟議をすることを通して生み出される数々の取組や成果は、地域とともにある室積学園のめざす姿を象徴するものであると確信している。

3点目は、組織的に運用することの重要性を確認できた点である。組織を一本化することで、より多くの人々が全体の動きを見つめながら学校運営に携わることができるようになった。さらに、室積学園教育目標、めざす子ども像、3つの力を中軸に子どもたちのつながりづくりや学校評価等の運用を図ることで、多くの人を巻き込み、学校運営への参画機運を高めることにつながった。組織的な体制を整えることは、多方面への運用や持続可能な取組につながり、子どもたちの成長を大いに促すと考える。

課題については、室積学園教育目標、めざす子ども像、3つの力をさらに共有していくために、小中一貫

校としてのグランドデザインに位置付け、地域にも発信する必要があると考える。また、組織的に運用するために、小中一貫コーディネーター（教諭）を校務分掌に位置付けること、学校運営協議会の部会とチームで役割を担うプロジェクト型校務分掌組織を連動させること、総合的な学習の時間を軸とした「学校・地域連携カリキュラム」を作成することが挙げられる。

おわりに

校種間の学びをつなぐことは、子どもの成長に資するだけでなく、教職員の資質・能力の向上にもつながっていく。さらに、それを地域連携教育と一体的に推進することにより、地域とともにある学校づくりや学校を核とした地域づくりを促すことが可能となり、学校運営の質的向上を図るだけでなく、地域に活力をもたらす。学校と地域、あるいは異校種の学校をつなぐために「学校・地域連携カリキュラム」をその中核に据えることによって、子どもたちに身に付けたい資質・能力やそれに即した学習活動を学校・保護者・地域、そして子どもたちと共有することができる。「学校・地域連携カリキュラム」はそれぞれの立場をつなぐためのツールであり、小中一貫教育と地域連携教育を一体的に推進するための非常に有効な存在であると言える。

付記

本論文の内容は、宮内朋子が執筆した山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の実践研究報告書に加筆・修正を加えたものである。もう一人の筆者、松田靖は宮内朋子の指導教員として適宜アドバイスを与えるとともに、本論文執筆に際しては、全体の総括及び部分的な修正の指示を行った。

参考文献

- 貝ノ瀬滋：『小・中一貫コミュニティ・スクールのつくりかた』，ポプラ社，2010.
- 貝ノ瀬滋：『図説コミュニティ・スクール入門』，一藝社，2017.
- 妹尾昌俊：『変わる学校、変わらない学校』，学事出版，2015.
- 田中博史・柳瀬泰：『学校をもっと元気にする47の熟議』，東洋館出版社，2013.
- 宮内朋子：学校・地域連携カリキュラムを通じた小中一貫教育の推進，「令和3年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻実践研究報告書」，2022.
- 文部科学省：「小学校学習指導要領（平成29年告示）」，2017.
- 山口県教育委員会：「社会に開かれた教育課程の実現に向けて～学校・地域連携カリキュラムを生かすには～」，2021.
- 山口県教育委員会：「令和3年度 山口県教育推進の手引き」，2021.

引用文献

- 1) 中央教育審議会：「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（答申）」，2014.
- 2) 佐藤晴雄：『コミュニティ・スクール「地域とともにある学校づくり」の実現のために』，エイデル研究所，2016.
- 3) 佐古秀一：『管理職のための学校経営R-PDCA』，明治図書，2019.